



夕刊

発行所 中日新聞社
名古屋市中区三の丸一丁目6番1号
〒460-8511 電話 052(201)8811

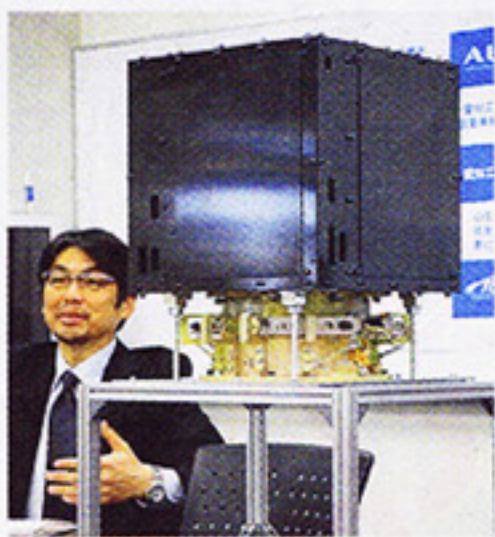
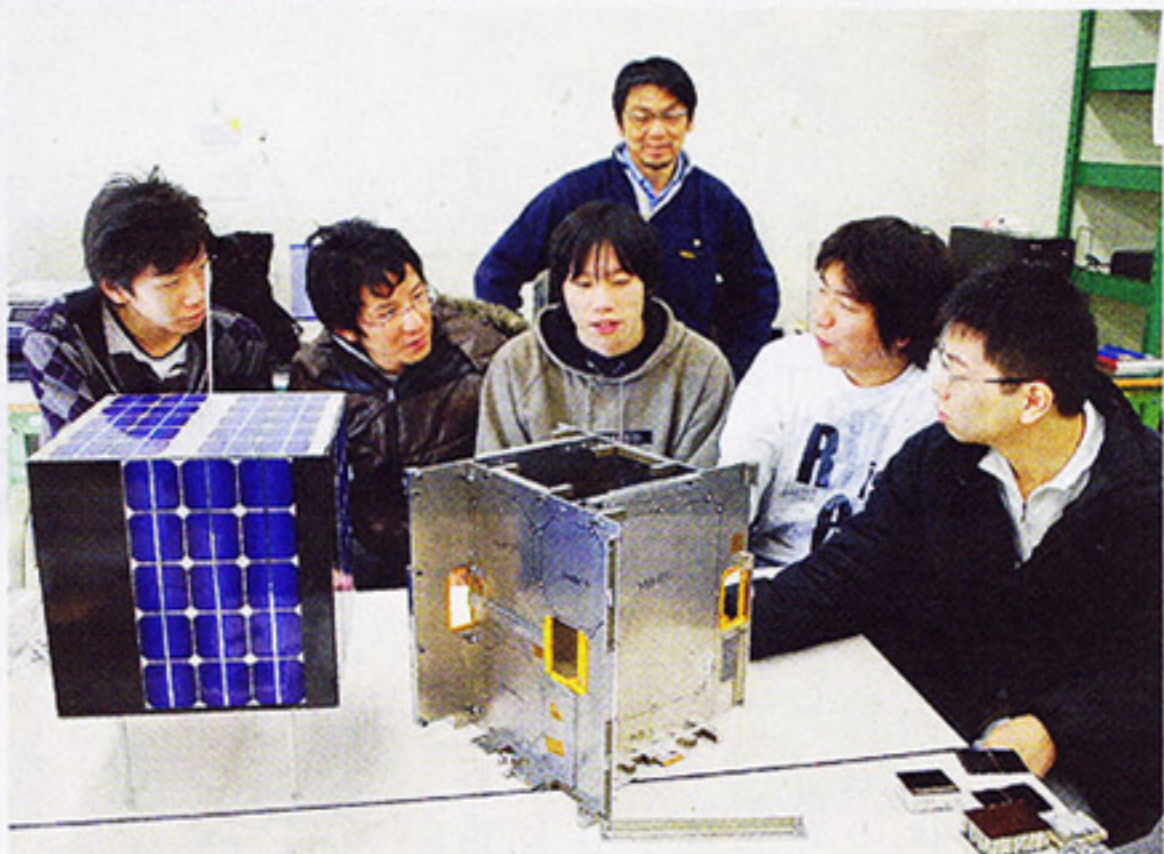
学生衛星できた

国内二十の大学などによる共同プロジェクト、深宇宙探査機「UNITEC-1」の開発で、愛知県蒲郡市の愛知工科大の学生が製作を担当した機体が完成。最終試験を経て、今年中にも日本初の金星探査機「あかつき」に相乗りして、H2Aロケットで打ち上げられる。地元企業のサポートも得て、ものづくりの先端を体験した学生は「自分の手で作ったものが宇宙に行くなんて信じられない気持ち」と打ち上げを心待ちにしている。

(蒲郡通信局・中山聡幸)

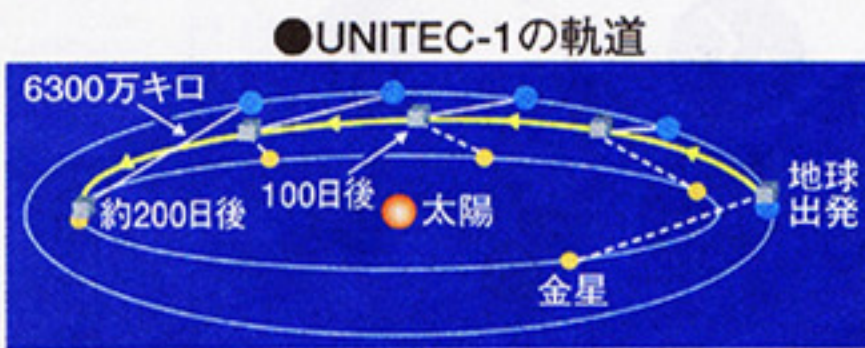
今年中にも金星へ

①試作機を囲み製作作業を振り返る学生たち ②完成したUNITEC-1の機体。左は奥山准教授＝愛知県蒲郡市の愛知工科大で



UNITEC-1 重力圏外での活動に挑むのは、世界で初めという試みだ。打ち上げ後、地球から約六千三百万キロ離れた金星に接近してか、太陽の周りを楕円軌道に回り、慶応大などの六つの大学が製作したコンピューターを積み込み、過酷な環境の宇宙空間でこれが最後まで残り競争をするのが最大のミッション。愛知工科大では、工学部ロボットシステム工学科の奥山圭一准教授(右)の研究室が参

加。「以前から宇宙に興味があり、話を聞いて飛び付いた」という浅倉秀紀さん(三)ら四年生の五人が、実験の舞台となる機体の製作を担当した。機体には、ロケット打ち上げ時の振動や金星近くでは二百度からマイナス二百七十度に



蒲郡の企業もサポート

激変する温度差に耐えられたのが地元の精密部品加工業・蒲郡製作所。部品の材料となる四月、北海道大と九州特殊なジュラルミンなどの製造・加工を請け負った。伊藤智啓社長は、図面を書くところからスタートした。学生の引いた図面以上に精密なものを作り、宇宙探査機の製作はもろろん初めての体験。部品の形状に試行錯誤を重ね、別の衛星に使用された太陽光電池を再利用する独自の加工法も編み出した。時間的制約がある中、いざ組み上げるとねじ穴の位置が違って真っ青になったり、搭載部品の仕様が一つ変わっただけで辛くなる。全面的に見直しを迫られたりもしたが「みんなの熱意」(奥山准教授)で切り抜けた。

学生らを全面的に支えた。過去にロケット打ち上げにかかわった経験のある奥山准教授は「無事に打ち上げが成功した時の喜びは言葉に言い表せない。学生たちがどんな顔をするか楽しみだ」と話す。

小型衛星 ロケットの打ち上げ余力を生かす。本来の目的の衛星と一緒に打ち上げられる。民間企業や大学による宇宙利用・研究のすそ野を広げる機会として活用される。宇宙航空研究開発機構(JAXA)が打ち上げる「あかつき」にはUNITEC-1を含め、公募に応じた計4基が相乗りする。